漫画家

東　元(あずまげん)

かよ　「こんにちはです。うち、『かよちゃんの駄菓子屋』の『かよ』です。よろしくです〜」

タマ　「皆さん、こんにちは。あたしは『なでしこナイン』の『タマ』。今日はかよちゃんと漫画の話をするよ〜」

東元　「あの〜、僕もいます」

東元　「漫画って以前は雑誌で読むものだったけど、今は雑誌に加えてパソコンやスマホでも読めるね。コミケなんかの同人誌もすごく盛り上がってます」

東元　「かよちゃんとタマの主戦場は?」

かよ　「うちは雑誌ですぅ〜!!」

タマ　「あたしはWebコミック!!」

東元　「どう違うんだろ?」

かよ　「うちは本屋さんやコンビニさんで売っている雑誌に登場します〜」

東元　「長い間、漫画が読まれてきた基本的な形だ。近頃は雑誌の売上が落ちてきてるって聞いたけど…」

かよ　「ちょっと残念です〜。それでも、昔からずっと続けて読んでくれてる人に楽しんでもらえるように頑張ってます〜!!」

タマ　「そこでここ最近一気に充実してきたのがWebコミックなの。最近はどの雑誌社も漫画の読めるWebサイトを立ち上げてるし、無料で読める漫画も多いよ。どれを読もうか悩んじゃうほどたくさんあるよ〜」

東元　「紙をめくる感触を味わいながらドキドキして雑誌を読むのもいいし、スクロールやスライドでWeb漫画をスピーディーに楽しむのもいいね」

かよ　「先生、うちらはどうやって生まれますか?」

タマ　「あたしも聞きたい〜!!」

東元　「描き方は漫画家それぞれだけど、僕の場合はまず決められたページ数を頭に入れながらセリフと行動を中心にシナリオを書く。そのシナリオを漫画のページ数に収まるように割っていくんだ。1ページはここまで、2ページはここまで、みたいに、試行錯誤しつつシナリオを決められたページ数に分割する。その時頭の中では人物が映像として動いているから、大きなコマを取る必要があるところなんかはその時に考えておく。

かよ　「いきなりコマ割りをするのかと思てました〜」

東元　「連載の場合はページ数が決まっているからね。いきなりコマを割ると後でページが余ったり、ページが足らないとなったときに修正するのが大変なんだ。だから僕の場合はまずシナリオを書いておくんだ」

タマ　「へぇ〜、まずシナリオをページ割して、そこからやっとコマに割っていくんだ」

東元　「そうそう、それが終わったら、鉛筆でセリフと大まかな人物の位置を描き込んで、他の人が読んでも内容がわかるようにコマを割って描く。それを編集者に見せるんだ」

かよ　「あ、うち知ってます。それ、ネームいうやつです〜!!」

東元　「ピンポ〜ン♪」

タマ　「あたしも聞いたことあるよ〜。ネームが大事だって」

東元　「それそれ。ここが一番大事なんだ。漫画の設計図みたいなもんで、これをもとに編集者と話し合うからね」

かよ　「めんどくさいですぅ〜」

東元　「確かに。編集者の意見なども聞いて、さらに修正する場合もあるからね(T ^ T)」

タマ　「ひぇ〜」

東元　「その後、編集者のオーケーが出たら、やっと原稿用紙に下描きだ」

かよ　「下描きして、枠線引いて、人物のペン入れて、背景描いて…」

タマ　「消しゴムかけて、スクリーントーン貼って…」

かよ　「うち、頭がクラクラしてきました〜」

東元　「孤独で長い道のりの始まりだ…」

東元　「ここで嬉しいお知らせです。今言ったのは紙にペンとインクで描いていた頃の話で、今は僕もパソコンでフルデジタルで描いています」

タマ　「わぁ〜、フルデジだぁ!!」

かよ　「フルデジ、フルデジ!!」

東元　「ネームやペンを入れる労力は同じだけど、枠線やトーンはクリック一発だし、最後の消しゴムもいらないし」

かよ　「便利になりましたか?」

東元　「うん、少し人物の大きさや位置を変えたい時なんかも便利」

タマ　「そっか、アナログならホワイトで消したり、切り貼りしなきゃならないもんね」

東元　「それに、なんといっても原稿を郵送しなくていい。アナログ原稿の時は締め切りギリギリで、わざわざ新大阪まで行って新幹線便で送ることがあったけど、今はデータで入稿だからネットで送れるしね」

かよ　「バンザ〜イ、バンザ〜イ!!」

タマ　「時間が節約できる分、可愛く描いてね」

東元　「頑張りマス!!」

タマ　「漫画家になってよかったことはなーに?」

東元　「ほんと単純なことだけど、『面白かった』と言ってもらえた時かなぁ」

かよ　「うわぁ、単純ですぅ」

東元　「そう言ってもらえただけで、その人のことは一生忘れない」

タマ　「ホントかなぁ?」

東元　「短い言葉だけど、その一言で描いててよかった〜と思えるから不思議」

かよ　「うちも『ありがとう』て言われたら嬉しいですぅ〜!!」

タマ　「そうだね、あたしは『ナイスピッチ』って言われると俄然(がぜん)力が湧いてくる」

東元　「ね、そんなもんだよ。漫画に限らず、どんな時も良かったと思ったら、短い言葉でいいから素直に声をかけてみよう!!」「さん、ハイッ」

かよ　「先生の漫画面白いですぅ〜!!」

タマ　「面白いからもっと読みたいよ〜!!」

東元　「よろしい」

かよ　「うちがいつか漫画描きたなった時はどうしたらいいですか?」

東元　「僕が一番重要だと思うことをひとつ挙げるなら、まずは最後まで描くこと。最初はショート漫画や四コマ漫画のような短いのでもいいから、完成させること。時間がかかってもいいからさ」

タマ　「短いものなら簡単なように思うけど…」

東元　「簡単なようで、これが意外と難しいんだ。でも、何かひとつ描いてみようと思って、頑張って完成させた時はホント気持ちいいよ!! これは何にでもいえることだろうけど」

タマ　「うん、それはなんとなくわかる」

東元　「未完のままほっぽり出した時と最後まで描いて完成させた時に、次に見える景色はぜんぜん違う。ちょっと大袈裟(おおげさ)だけど」

タマ　「ほんと、大袈裟(おおげさ)〜」

かよ　「うち、頑張ります〜!!」

東元　「では最後に、かよちゃんとタマ、二人に会うにはどうしたらいい?」

かよ　「うちは『かよちゃんの駄菓子屋』という漫画に不定期連載で出ていますぅ!!」

タマ　「あたしは『なでしこナイン』という漫画に3週に一度金曜日に登板しています』

東元　「かよちゃん、タマ、今後ともよろしく」

かよ　「これからも活躍させてください〜」

タマ　「かっこ良く描いてね〜」

東元　「オッケー!!」

東元　「みなさんもかよちゃんとタマをどうぞよろしくお願いします!!」